

主な掲載記事一覧(R2.7~R2.11.30)

【新聞】

情報掲載日	記事名	掲載媒体名	ページ	主要記事
R2.7.9	異質なものと「共存」問う 前橋で再始動 廣瀬智央さん個展	読売新聞	20	廣瀬智央展
R2.7.10	【美術評】生命の痕跡浮かび上がらせる 廣瀬智央個展「地球はレモンのように青い」	東京新聞・夕刊	3	廣瀬智央展
R2.7.12	廣瀬智央「地球はレモンのように青い」展 「生の喜び」鮮やか	産経新聞	11	廣瀬智央展
R2.9.8	社会を反映する「糸」	上毛新聞	9	糸の記憶展
R2.9.18	文化紀行「糸の記憶 アーツ前橋所蔵作品から」	朝日ぐんま	3	糸の記憶展
R2.10.21	レモン皮で再生紙作り	上毛新聞	16	廣瀬智央展
R2.10.27	コロナ退散祈り 大小四つの木馬	上毛新聞	21	駅家の木馬
R2.11.7	アーツ前橋 2作家の6作品紛失 高崎出身遺族所有 書や版画	上毛新聞	19	アーツ前橋全般
R2.11.8	アーツ前橋 6作品紛失 廃校空き教室で保管	朝日新聞	23	アーツ前橋全般
R2.11.10	アーツ前橋、作品紛失を正式公表 再発防止へマニュアル	上毛新聞	23	アーツ前橋全般
R2.11.10	前橋市 木版画など6作品紛失 美術館収蔵へ保管中	読売新聞		アーツ前橋全般
R2.11.10	アーツ前橋6作品紛失 廃校で保管 木版画と書、誤廃棄か	毎日新聞		アーツ前橋全般
R2.11.10	前橋市、2作家の6作品紛失 把握直後公表せず	東京新聞		アーツ前橋全般
R2.11.14	木版画など紛失 前橋市長が謝罪「再発防止対策努める」	産経新聞		アーツ前橋全般
R2.11.16	2作家の6作品紛失で山本・前橋市長が陳謝「所有者に対し大変申し訳ない」	東京新聞		アーツ前橋全般
R2.11.16	場所をテーマにスケッチや写真	読売新聞	27	場所の記憶
R2.11.29	「場所」テーマに50点 3月までアーツ前橋で企画展	上毛新聞	17	場所の記憶展

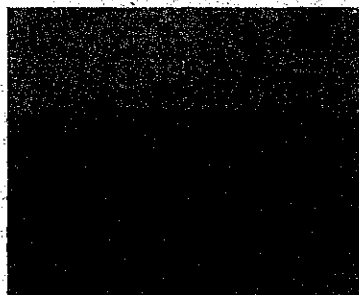
【雑誌・冊子】

情報掲載日	記事名	掲載媒体名	ページ	主要記事
R2.8.21	前橋アート&カルチャーさんぽ	散歩の達人	79	アーツ前橋全般
R2.10.12	廣瀬智央さん 食材がアートになった理由	HERS	86	廣瀬智央展

【テレビ・ラジオ】

情報掲載日	記事名	掲載媒体名	主要記事
R2.9.23	糸の記憶(ほっとぐんま630)	NHK	糸の記憶展
R2.11.9	アーツ前橋 借用の6作品を紛失(ニュースeye8)	群馬テレビ	アーツ前橋全般
R2.11.9	「アーツ前橋」で6作品を紛失(ほっとぐんま630)	NHK	アーツ前橋全般
R2.11.16	博物館へ行こう！(宇賀なつみのそこ教えて！)	BS朝日	表現の森

前橋で再始動 廣瀬智央さん個展



地方の美術館も感染防止対策を施し、再開に踏み出している。約3か月の臨時休館を経て6月1日に再開した前橋市のアーツ前橋では、美術家・廣瀬智央さんの個展「地球はレモンのように青い」が、会期を変更して開かれている。

同館では入り口に「健康状態申告書」の記入台を設置。来場者は健康状態などを記入し、検温後、入場制限された会場をゆったり巡る。住友文庫館長は「6月19日に移動自粛が解除され、人の流れが出てきた。県内外を問わず、作品を見ることが、美術館を訪れることが喜ばれていると実感している」と説明する。

廣瀬さんは1983年、東京生まれ。多摩美術大卒業後、イタリア・ミラノ留学を経て、現在はミラノと東京を拠点に活動を続

展示室にレモンを敷き詰め、爽やかな香りも漂わせる廣瀬智央さんの「レモンプロジェクト 03」(1997/2020年)。

けている。

会場には「両義性」をテーマにしたインスタレーション(空間芸術)の立体が並ぶ。豆をアクリル樹脂に閉じ込めた「ビーンズコスモス」シリーズや、巨大な木の球体を造花で覆った新作など、自然物と人工物を一体的に見せることで、異なるもの同士の「共存」を語りかける。

約3万個のレモンを床に敷き詰めた「レモンプロジェクト 03」は、97年に東京・銀座で発表以来、国内で23年ぶりに再制作した。イタリアのレモン畑での感動が原点にあるという作品は、果実と精油の香りが一体となって漂い、視覚と嗅覚を刺激する。

廣瀬さんが2018年から進めている「空のプロジェクト」も紹介。空の写真を前橋市の母子家庭生活支援施設の子供たちや母親と交換し合う取り組みで、空の写真を「感じる」ことを通して、人間の相互理解の可能性を問うている。

廣瀬さんは「アートは解決や解答を示すものではなく、問いかけ。人生の幸せや豊かさをアートで感じてもらえたら」と願っている。28日まで。水曜休館。

異質なものの同士「共存」問う

◆ 2020年7月9日(木)

◆ 読売新聞

20 面

記事名: 異質なものの同士「共存」問う 前橋で再始動 廣瀬智央さん個展

備考:

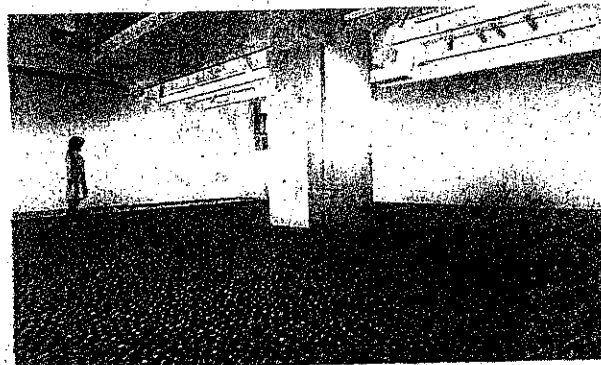
静謐感と洗練を極めた展示に見えるが、同時に、これほど切迫感と危機に満ちた展示も近年なかった。この時期に開かれるほかの展示の例に漏れず、本展も新型コロナウイルス感染症の蔓延で、何度かの開幕の延期を余儀なくされたからだ。

しかしそれだけではない。本展の美術家、廣瀬智央は、活動の拠点を海外、しかも一時はパンデミックの頂点にあったイタリア、ミラノに置くため、順調な来日そのものが危ぶまれ、到着してもPCR検査と一時的な自宅待機を余儀なくされたからだ。しかも廣瀬の展示は、絵画を送って飾るだけ、というわけにはいかない。現代美術のなかでも、ひときり体感性の高い展示であった。

と言っても、廣瀬の作品は手で触って鑑賞するものではない。主要な要素のひとつは、香りである。実際、入り口から一歩入っただけで、また先にある展示が放つ香り

廣瀬智央個展「地球はレモンのように青い」

美術評



《レモンプロジェクト03》1977 (2020)
—木暮伸也撮影

生命の痕跡浮かび上がらせる

で、鼻が二気に満たされる。展示の中心となるのは、三万個におよぶ生のレモンを使って二十三年ぶりに実現した「レモンプロジェクト03」なのだ。実際、会場のどこにいても、レモンから届く香りの分子が、私たちのからだにじかに取り込まれ

ていることになる。ひときり体感性が高いと書いたのは、そのためだ。けれども、この性質ゆえに廣瀬の展示は今回、展示に臨むにあたって彼自身が意識したという「両義性」を、想定を超えて強く帯びたものとなった。レモンの香りは爽やかそのもので、じめじめした日本の梅雨の季節につきものの鬱陶しさを吹き飛ばしてくれる。しかし昨今の状況では、来場者はマスクの着用を推奨されている。むしろ、マスクをとって作品の香りを胸いっぱい吸い込むことは可能だ。

だが、その際、来場者は人とのあいだの距離を十分に取ることを意識させるをえない。きちんとレモンの香りがしてくれるか、不安に思う人もいるかもしれない。新型コロナウイルス感染症では、初期の症状として、ものの匂いや味がまったくなくなる事例が多数、報告されている

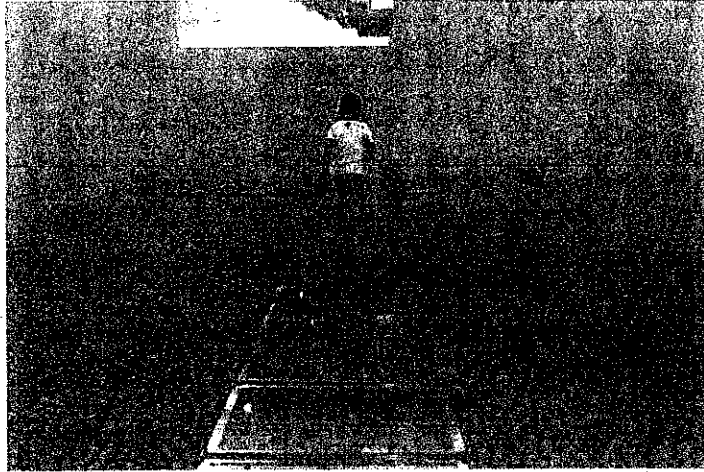
からだ。

このように、嗅覚は、私たちの心理や味覚に直接、働きかけてくる。それを最大限に活用した展示は、現代美術の世界広しといえども、そうあるものではない。めずらしいだけでなく、難しさも半端ではない。美術館の展示空間に匂いを発する生ものを並べるのは、そつでなくても大きなリスクがある。三万個のレモンなら、言つまでもない。

いにしえの時代、匂いは生き残るための感覚として、たいへん大きな意味を持っていた。動物のことを考えれば、すぐにわかる。それに比べれば、視覚は悠長だ。ならば、それを主に据える美術も悠長なのだ。廣瀬の作品は、こうして美術の悠長さの奥底に隠された生命の痕跡と危機感を、静謐と洗練のなかから、まさしく両義的に浮かび上がらせる。

(樫木野衣＝美術批評家)
*前橋市千代田町5の1の16、アーツ前橋 電話027・2300・1144
で。26日まで。水曜休館。

「レモンプロジェクト03」(1997/2020年)。会期後はレモンを紙やせっぽんに再生するという
(黒沢綾子撮影)

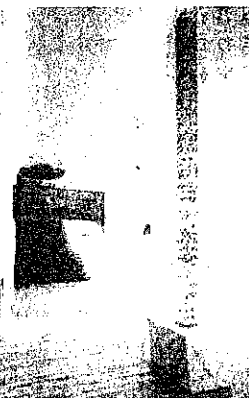


廣瀬智央「地球はレモンのように青い」展

「生の喜び」鮮やか

とどろきに満ちた画面をオン・ラインで見ても、伝わらないこととなる。イタリア在住の美術家、廣瀬智央(ひろせ とも)は、手触りや、質感を伝うインスタレーションで知られる。アーツ前衛(前掲)で開催中の初の大型個展「地球はレモンのように青い」は、コロナ禍で閉じ込められた観客のつらさを癒すべく企画された。

「西洋美術は伝統的に複製を好む。目にみえない、形の残ったものは複製されてきた。その中で僕は目に見えないものを複製したい」と考えた。例え、時間、約200万の会期中、レモンは入れ替わられることなく日々、色も風合いも変化してゆく。



廣瀬智央展の展示風景。手前は「無題(豆の神話学)」2008年 (木暮伸也撮影)

花で球体を覆った作品「フオルストバル」も、植物の種を丸めて土を丸めた「種園」も温存しながら静かな空間を演出している。

イタリアの美術家「アルチ・ボウエラ(Alti Bovala)」の作家、ルチアーノ・ファフロ(Luciano Fabro)2007年に制作した作品は、身の回りにあるものを素材に、口の中にあるような「生の喜び」を中々上げてきた。食料を口の中にあるのは「イタリアは食べ物がいっぱい」(笑)。トスカナ地方の伝統的な豆のスープは「生を生きる存在でいて絶えらわれない」(笑)も、作風に

傾斜する。「多様な価値観に触れることで、人間の行動をどう変えていったか」という廣瀬にとって、豆をアクリル樹脂に封じ込めた美しい立体作品は、あじまい複雑な世界と、その豊かさを表裏するのだろう。

立派な絵画、写真、インスタレーション。廣瀬の表現手段は多岐にわたる。目に見えない「フオルストバル」を大切にしているのがわかる。

廣瀬は前掲市内にある母子生活支援施設の子供たちと、互いに描いた絵の写真をエメールで交換するが、互いに描いた絵の写真が、協働し相互理解を深めるプロセス、つながりこそが作品といえる。

「無題」作品もある。ボストン・ロナーの美術館は、独特の緊張感に包まれているが、「今だからこそ、感動を使おう」という廣瀬の思いが、より深く理解されるのではないかと、同館の五十嵐穂香(いそはな)も、感動している。

28日まで、水曜休。(黒沢綾子)



市民から寄せられた古着で作った初代ユニホーム

来月13日までアート前橋 企画展「糸の記憶」

服飾や生糸・養蚕に関連した25作品を紹介する企画展「糸の記憶」が10月13日まで、前橋市のアート前橋で開かれてい

る。所蔵作品を中心に写真、映像などジャンルを問わず、文化や社会を反映する「衣」に焦点を当てている。

来場者の目を引くのは、同館に勤務する受付・監視スタッフのユニホームを紹介する展示だ。

2014、19年に着用した初代ユニホームは、約1年間にわたって市内で開いたワークシヨップを基に作った。一般参加者のアイデアと市民から

社会を反映する「衣」

同館ユニホームや石内さん写真

集められた211点の古着を用いて、紺色のワンピースに仕上げた。現在の2代目ユニホームは18年からリニューアルに取り組み、大きささまざまなポケットが帯のようにつながったデザインを採用した。ワンピースから印象を大きく変えたが、初代に引き続きワークシヨップを基に制作。肩に掛ける、腰に巻くといった着方や、ポケットを自由に付け外しするアレンジはスタッフ自身に任せている。

学芸員の辻瑞生さんは「性別や体形なく、着る人を選ばない。決められた同じものを着るのではなく、スタッフの目印になるものとして着用している」と話す。スタッフそれぞれの着こなしに注目するの、楽しみの一つになっている。

桐生市の写真家、石内都さんが故郷に残されていた銘仙や絹織物を撮影した「絹の夢」シリーズのほか、同館の滞在制作事業で招聘したイスラエル出身のアーティスト、ケレン・ベンベニスト、ティさんが、前橋の水と養蚕をテーマにした映像作品「ハーフラ이프」も展示している。

水曜休館、観覧無料。午前10時～午後6時。問い合わせは同館（☎027・2330・1144）へ。

又
化
紀
行

2010年「かぐや姫」主演
長崎国際劇場、東京・豊
田劇場、豊田会館
劇場の出演、そのほか
の公演(2012年)
田中幸雄展(2016年)
横田、久保風(2017
年) 久保風展(2018
年) 久保風展(2019年)

アイソ前橋では今年3月から開催しています。

5月未までの約3カ月にはたゞ臨時休館した後、展覧会が事業計画の見直しを余儀なくされた。この時期、出展作家による「グループレ展」と、上巻の展覧会を予定していましたが、参加アーティストの展覧準備のための移動や作品集積が困難であるなどの理由から延期や中止となる。しまの事したをじて代わりに現存、もともと展覧室も開催予定だった禁止画展系の記号、デールの甚いです。このように、衣服以前橋所蔵作品から手を拡大しは人物の性格や人間性を持つ

なりと云ふことで多重露城のよう
な理想効果を作り出していきます。
この露城家であつた作者の実象に
違はれた。誰か居てゐるかわか
らない写真と、その地味に今迄残
る茶の木の写真が神妙にまじり合
てゐます。かつ、著者が盛になつた
この地域の歴史を、担が手として
産業を支えた無名の女性に、その
名前を冠してゐる。

あり、無かたは、時の流行に流布したファッションから提供された約200着の古着を素材にワークスウィアを制作した初代ユニフォームも、体型に性別を関係なく着用者の好みで着たのを正味で着る時代同様にワークスを展示しています。

後半部分で同生者と、心相通の注目を浴びたといふ。そして、本展覧会は大場無料の美術館での広大な空間で、作品を過ごす素敵をひととほの故の巨匠を上げ、故郷をたづねた。

船方向は、ついで船を岸
向に短冊状に解体し、そ
のてを織物のように丁寧に

■より船橋へ通ずる市バスは、5月16日
02:30、03:44、06:16、08:36、午
10:00、11:30、14:00、16:30、18:30、

⑨市民から提供された200冊の古書を題材に制作されたアニメーション「ユニフォーム」⑩木村佳彦(身長100cm) 2001年、ドイツで197cm(2足の巨男)になるまで、アスリート

みどり

芸術家の広瀬智央さんと桐生大短期大学の学生らが、レモンから紙を作るプロジェクトを進めている。20日は、広瀬さんと同大講師の寺村サチコさん、アート・デザイン学科の学生4人が、みどり市の同大で試作に取り組んだ一写真。

プロジェクトは「循環」がテーマ。広瀬さんが6、7月にアーツ前

レモン皮で
再生紙作り
広瀬さんと桐生大短期大



橋（前橋市）で開いた個展「地球はレモンのように青い」で展示した作品「レモンプロジェクト03」に使用したレモンを再利用している。

レモンの皮と古紙を、ミキサーで細かく刻んで混ぜたものに水とのかき油を加え、乾燥させて作る。これまでも、レモンの皮と古紙の割合を調整しながら試作を重ねている。

広瀬さんは作品に使用したレモンからせっけんを作るプロジェクトも進めており、今後、完成した紙はせっけんのパッケージに使うほか、学生が考案する紙製品に使用する予定という。

広瀬さんは「学生と協働することによって創造性が生まれると思う」と話した。

コロナ退散祈り 大小四つの木馬

井大通りに登場

前橋

疫病退散や地域活性化を願う「駅家ノ木馬祭」(同美何員会主催)が30日まで、

前橋市の井大通り商店街で開かれている。アーケード街にのほり旗や巨大な垂れ幕を掲げ、大小四つの木馬を展示し写真最終日には「コロナ退散」の祈りを込めて木馬隊が通りを練り歩く。

同祭は2011年に始まった。

現代美術家の田川吉生さんの井大通り掘起しが創作した、自然災害や大火、コレラなどの不幸が襲った幕末から明治初期にかけての前橋を舞台にした物語が基になっている。

例年は子どもたちを集めて木馬が街中を練り歩くが、新型コロナウイルス感染症対策で、規模を縮小して巡回する。実行委員長を務める田川さんは「物語では混乱を乗り越え地域再生へと向かう様子を描いた。コロナ禍が早く終息することを願いたい」としている。



◆ 2020年10月27日(火)

◆ 上毛新聞

21 面

記事名: コロナ退散祈り 大小四つの木馬

備考:

2作家の6作品紛失

高崎出身 遺族所有書や版画

アーツ前橋

前橋市の美術館「アーツ前橋」が、高崎出身の作家2人（ともに故人）の遺族から預かっていた作品6点を紛失していたことが6日、分かった。廃校になった旧前橋二中校舎（前橋市城東町）の教室内で、教育委員会の不要物と一緒に保管されていた。誤っての持ち出しや廃棄、盗難の可能性があると、市は作品を所有する遺族に謝罪した。

廃校舎で保管中

市によると、紛失したのは高崎出身の物語作家2人による書と木版画の計6点。2018年12月、収蔵に回った作品評価のため遺族から52点を預かり、同校舎の空き教室で保管していた。

同館学芸員が今年1月、市収蔵美術品専門委員会での評価に回す予定だったが、作品がなくなっていること

通常、預かり受けた美術品は同館内の保管庫で保管されるが、カビや虫食いとあったコンディションの問題があり、他作品への影響

を避けるため一時的に同校舎で保管していた。学校の不要物と一緒に保管していたが、床にテープを貼るなどして廃棄予定の物とは区別していた。最後に全作品がそろっていることを確認したのは昨年3月だった。

空き校舎は市役所で鍵を借りて警備を解除する必要があり、市職員と教職員が出入りできた。市内全小中学校への照会、不要物を搬出した職員や業者へのヒアリングも行ったが見つからなかった。校舎は施設整えられていたほか、窓ガラスが割られたり警備会社によるセンサーが作動したりした形跡もなかった。市は職員が間違えて持ち出した可能性や盗難の可能性もあるとして調べている。

市は7月に遺族へ経緯を説明した上で、9月に眞警へ相談した。

同館を所管する市文化国際課の田中力課長は「誠心誠意、遺族への対応を尽くし、再発防止に取り組んでいく」と話した。

アーツ前橋 6作品紛失

廃校空き教室で保管

前橋市の美術館「アーツ前橋」(同市千代田町3丁目)が、高崎市出身の作家2人の遺族から預かっていた作品計6点を紛失していたことがわかった。誤って持ち出されたり廃棄されたりした可能性もあるとみて遺族に謝罪し、原因を詳しく調べている。

市「誤廃棄などの可能性も」

前橋市によると、紛失したのは高崎市出身の作家2人が手がけた木版画4点と書2点の計6点。2018年12月、同館での収蔵に当たって、2人の作品計22点をそれぞれの遺族から預かり、廃校になった旧前橋市立第一中学校の空き教室で保管していた。ところが、同館の芸員が今年1月、このうち作品3点が保管所がないことに気づいた。さらに調べたところ、2月にも新たに3作品が紛失したことが判明。計6点の約50万円を見込まれる作品も含まれていたという。

有する遺族に紛失した事実を説明し、謝罪。追加調査の結果を踏まえ、10月にも再度説明に赴いたという。これまで、旧第三中に入りしていた職員や芸員、運送業者などに聞き取りを重ねてきたものの、現時点で紛失の原因はわかっていない。旧第三中は施設され、不審者が侵入した形跡や警備システムの作動が確認されたことはないが、盗難の可能性も排除できないとしている。

市はこれまで、紛失の事実を公表していない。同館の徳田裕一副館長は「まず遺族への説明が先だと考えていたが、調査に時間がかかり、遺族への説明が遅くなってしまうため」と釈明。そのうえで、「遺族には希望直後に説明すべきだったが、初動対応が遅れたのは事実。保管作品の管理徹底に努め、再発防止を図る」と話している。(中略)

五感の大切さを実感

レンゲ
ツツジ

新型コロナウイルスの感染拡大により、約2か月間の在宅勤務を経験した。新学期のスタートを目前に、これまでに体験したことがないオンラインでの講義に向けて、大学教員として「待ったなし、言い訳なし」の対応に迫られた。不安な気持ちで向かった。パソコン画面から広がっていたのは、瞬時に時空間を超え、必要な情報を探し当てることのできる世界だった。



群馬大学大学教育
・学生支援機構教授
結城 恵

きた。不安要因だった遠隔講義の仕組みの理解、アプリケーションソフトの操作の習熟、オンライン形態に合わせた講義内容の再構成も楽しみに変わっていった。

ところが、「在宅勤務がそのままの状態でも長く続いていたら、大切な感覚を失っていたのではないかと」と実感した瞬間もあった。その瞬間は在宅勤務が解除となった後、初めて出勤した朝、久々に職場の門をくぐった時にやってきた。

空気がこんなににおいしいなんて。幾重にも重なる小鳥のさえずりがこんなに清らかだったなんて。樹々の間を通る風が運ぶ桜の葉の香りが、こんなに心地良いものだったなんて。歩くたびに、自分の中の五感が研ぎ澄まされていくような感動があったのであ

る。

そして、その時に気づいた。オンラインに没入した期間は、私は「平面」に対して「聴覚」と「視覚」で向き合っていたことを。パソコン画面からは、「立体」的に「聴覚」と「視覚」を刺激することとは難しく、「味覚」「触覚」「嗅覚」を直接刺激することはできないということ。オンラインで「いま・ここ」を体感することの限界は、そこにある。

先日、アーツ前橋（前橋市）で、藤瀬智史氏の展覧会「地球はレモンのように青い」を拝見する機会を得た。丸い多様な素材を閉じ込めたアクリル球体。その後ろ側に回って気づいた天井から差し込む細い光線が球体を通るときに美しく、藤瀬氏はその意外性を意図して作品とされていたのか、そのことにどれだけの方が気づくだろうかと、心ひそかにわくわくする体験を味わった。

また、約3万個のレモンで床を埋め尽くす作品「レモンプロジェクト03」には、その空間に立った瞬間に、立体的な視覚に嗅覚と味覚までもが一気に刺激される不思議な感覚を味わった。オンラインに没入した時には失いがちになっていた、「いま・ここ」でしか味わえない感覚を、こころでも追体験した。

これからも進展するオンライン情勢のなかで、「いま・ここ」で五感を働かせる必要がある活動をどのように保証していくか。オンラインに依拠しすぎると弱まる感覚があることを私たちも自覚しておかなければならないだろう。また、五感が人を呼び込む「観光」「食」「芸術鑑賞」などの産業や営みの真価がますます問われてくるだろう。さらに、聴覚と視覚が味覚・触覚・嗅覚を刺激する新たな科学技術の開発も必要となるのではないだろうか。